

## 私の皮膚科医人生 ～41年間を振り返って

清水 宏

北海道大学名誉教授

### 皮膚科医になった理由

私の父は慶應義塾大学経済学部卒業であり、慶應義塾をこよなく愛していた。幼少時(図1)より慶應は日本で一番の大学だと聞かされ続けた。中学入試を経て慶應中部に入学、慶應高校に進学した。進路を決める時期が来て、当時典型的な反抗期だった私は、父と同じ道を進むのはよしとせず、医学に興味があったので、医学部に進んで医師を志した。しかし「医者とは視野の狭い人間が多いぞ」という父の言葉は私の心に強く響いた。「自分は絶対に視野が広い医者になるぞ」と心に誓った。

中学、高校とバレーボール部に所属し、医学部学生時代はキャプテンとしてバレーボール部の活動に明け暮れた。さらに医学部5年生のときに、南米のアマゾン川流域で活動する、慶應義塾大学医学部国際医学研究会(International Medical Association : IMA)と命名した学生団体を同級生3人で創設した。そして医学



図1 幼少時の私(奥)、姉(手前)。自宅の庭で動物に囲まれていた。



図2 アマゾン川下流の町ベレンで同級生とともに(右端が私)

部6年生の夏の2カ月間、私は生まれて初めて南米に足を踏み入れ、現地の病院で多数の患者をみることになった(図2)。驚いたことに、病院に訪れる患者の多くは皮膚に激しい病変があり、パラコキシジオイデス症、ハンセン病といった感染症から、南米の特殊な風土病までさまざまであった。学生の私は強烈なショックを受け、「皮膚病というのは病気の原型だ、こんな激しい病気に取り組んで治してみたい」と、皮膚科学に純粋なロマンを感じた。そして帰国後、皮膚科医の道を選んだ。その決断を聞いた母からは「宏、あなたは医者にならずに水虫とかニキビをみる皮膚科医になるの?」とがっかりしたようにいわれた。私は母に、皮膚科医は立派な専門医だと本気で反論したことが忘れられない。このときのやり取りはその後、『Archives of Dermatology』に書くことになった。興味のある読者はお読みください(Shimizu H : The Role of Dermatologists: My view 140 : 801, 2004)。

### 慶大皮膚科での21年間と人生の転機となったロンドン留学

早速入局した慶大皮膚科教室では、簗野倫教授と西川武二教授のもと、とにかく臨床を鍛えられた。私は

1つ1つの臨床症例を詳しく勉強し、症例報告の論文も誰よりも数多く書いて臨床能力を高めた。当初、研究にはあまり興味がなかったが、教室の先輩たちは皆楽しそうに研究していた。あまり気の進まないものの研究も始めてみると、意外に面白いと思った。当時私は病棟医長、外来医長、医局長など、雑務で忙殺されていたが、視野を拡げ、研究の技術も高めるために留学したいと考えていた。幸い、慶大の福澤基金という留学を支援する研究費を獲得することができ、どこでも自分が好きなところに留学できることになった。

アメリカは研究費を獲得しやすいからいつでも行けると思い、英国ロンドンを留学先に選んだ。それが私の人生の大きな転機になった。ロンドンでのボス、故・Robin Eady教授は表皮基底膜の先天異常で発症する表皮水疱症を専門とする有名な教授であった(図3)。私は博士論文で、「水疱性類天疱瘡の表皮基底膜自己抗原の解明」に取り組んでいた。ロンドンでは、表皮基底膜という日本での仕事との共通点を見出し、それが私の生涯の研究テーマとなった。表皮水疱症の基底膜の変化ならびに水疱性類天疱瘡の自己抗原を求めて、超低温post-embedding免疫電顕法という新技術を初めて皮膚科学の研究分野に応用して、多くの論文を書いた。留学は2年の約束だったので、34歳のときに慶大皮膚科に助手として戻った。

### 北海道大学の皮膚科教授になった理由

慶大皮膚科では第一研究室を任された。といっても名前だけで私一人だけの研究室だった。早速慶大皮膚科の若手の勧誘に乗り出した。私の一番弟子と

して7学年後輩の石河晃先生[現東邦大学皮膚科学講座(大森)教授]と秋山真志先生(現名古屋大学皮膚科学教室教授)を勧誘して研究室を立ち上げた。それから10年間、充実して仕事に打ち込み、土曜日も含めて毎朝7時～夜9時まで仕事に打ち込んだが、ワークホリックというよりはとても楽しく働き、42歳のときに慶大医学部では最年少の助教授に就任した。

1999年、突然北海道大学から、「あなたは皮膚科の主任教授候補として推薦された」という推薦状を受け取った。北大の教授職など考えたこともなかったが、当時私は同年代では誰よりも多くの研究費を獲得し、誰よりも論文を書いているという自負があったので、あまり驚かなかった。しかし中学入学の12歳から慶應にどっぷり浸かってきた私は迷った。44歳で北大皮膚科の教授になるか、あるいは、あと5年待って慶應の教授選に出るか？ しかしなぜか“北海道大学”という響きにはロマンを感じる、ならば挑戦してみようという思いが固まって履歴書を送った。そしてご縁あって、北大皮膚科の教授として1999年10月に赴任した(図4)。

### 北大皮膚科教授としての21年間

#### 1. 教室の立ち上げ

東京を離れ、一家そろって札幌に44歳で来たからには、世界一の皮膚科学教室を必ずつくる、という大きな夢があった。定年まで勤めれば20年近くあるわけだから、十分時間的ゆとりがあると考えた。赴任の挨拶では控えめに「日本一ではなく、世界で5本の指に入る質の高い皮膚科学教室をつくりたい」といったも



図3 左から山本明美先生、故・Robin Eady教授、私、清水聡子先生(妻)



図4 左から大河原章前教授、私、故・三浦祐晶教授



図5 入局2年目の研修医を連れてオーストラリアのエアーズロックの学会へ。左から乃村俊史先生、私、氏家英之先生

のの、私の頭には世界一の皮膚科学教室を目指すというさらに大きな目標があった。そのためには優秀な人材が必要だと思った。ところが赴任した年には、北海道大学の新卒者は誰も入局してこなかった。そこで私は3つの仕掛けをつくった。

#### 1) 皮膚科講義の一新

優秀な人材を集めるためには、魅力的な教室であるということ強くアピールすることが必要だ。そこでいままでの通常の系統講義は全部廃止し、講義を聞くことによって学生の「勉強したい」という気持ちを自然と湧き上がらせるような講義内容を、スタッフ各自で考えてもらい、さらに各講義を学生にフェアに採点してもらうことで講義の魅力・質を高めた。私は優秀でやる気のある学生を皮膚科に勧誘すべく全力で頑張った。すると翌年からしばらくの間、講義に触発

された北大出身の優秀な人材が年に7~8人のペースで、大勢入局してくれた(図5)。

#### 2) 皮膚科教科書の執筆

続いて、学生勧誘や、教室員を育てるために、自分が納得する皮膚科教科書を執筆することにした。それが単著の『あたらしい皮膚科学』(中山書店、2005年)である。教授生活は嫌でも時間が限られている。毎週1日は執筆の時間を確保するために、他病院でのアルバイトは一切せず、こつこつと5年半かけて『あたらしい皮膚科学』を執筆、2005年発刊した(図6)。ちなみに本書は、2011年に第2版、2018年に第3版を出版し、総計約7万部が愛読されている。日本の皮膚科医は約1万人であることを考えると、多くの他科の医師、医学生、医療関係者が本書で皮膚科学を学んでいると推察され、いまやスタンダードな皮膚科教科書となっており、本来の目的の学生勧誘にも大きく貢献している。

さらに2017年、世界最大の医学書出版社Wiley-Blackwell社から本書の英語版『Shimizu's Dermatology』を発刊した(図7)。日本人が単著の英文医学書を発刊するのは非常に珍しいが、皮膚科学を学ぶ世界の学徒に、日本からの最新の皮膚科学を届けたいと思っている。退官後は、『あたらしい皮膚科学』と『Shimizu's Dermatology』をさらに改訂して、版を重ねることに全力で取り組みたいと考えている。

#### 3) 英文論文の執筆、研究費の取得

やる気のある新人たちとともに教室員全員に自分の担当症例をとことん勉強してもらい、英文症例報告の執筆を強く推奨した。英文症例報告の質の向上は、

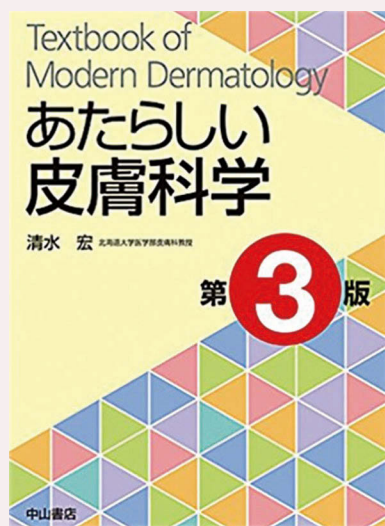


図6 『あたらしい皮膚科学、第3版』(中山書店)

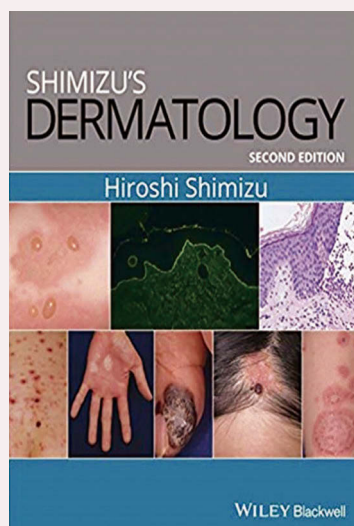


図7 『Shimizu's Dermatology, 2nd Edition』(Wiley-Blackwell)



図8 教室研究発表会の1コマ。前列左から、芝木晃彦先生、澤村大輔先生、私、秋山真志先生、阿部理一郎先生

自然に研究の質の向上、さらに研究論文の質の向上につながり、教室員の自信にもつながっていった。研究するには資金が必要で、研究費の取得という目標を教室全体で共有し、スタッフ全員が己に見合った科研費を最低限取得できるようになった。

## 2. 北大皮膚科教授としての公務

日本皮膚科学会や日本研究皮膚科学会の仕事も公務として当然入ってきた。日本研究皮膚科学会では、理事として早速、英文学会誌である『Journal of Dermatological Science』の編集長(Editor in Chief)に2003年に就任し、Journalの質の向上に努めた。一番たいへんだったのはElsevierとの契約更新であり、この件は私に一任されたものの困難なことばかりであった。Elsevierのトップとはパリ出張で10時間以上の交渉を粘り強く行い『Journal of Dermatological Science』の版權を日本研究皮膚科学会に戻すという確約も取って新しい契約を結んだ。そして本誌の発行資金を私が主任研究者となり科研費を獲得し、財政難の日本研究皮膚科学会を救うこともできた。また、日本皮膚科学会では理事、学術委員長となり、理事会のため、毎月のように上京した。

そしてこのような立場に伴い、海外からの度重なる講演依頼をこなし、自分でも限界と思うほど働いた。学会も日本皮膚科学会東部支部学術大会、日豪合同皮膚科学会等の国際学会、日本電顕皮膚生物学会(現皮膚かたち研究学会)などを主催し、教室員には本当に大きな負担をかけた。働きすぎがたたって私は体

調を壊し、日本皮膚科学会と日本研究皮膚科学会の理事を途中退任することにもなったが、長く持続可能な仕事量、教室の仕事とのワークライフバランスも学習し、以降はひたすら北大皮膚科教授としての仕事に全力を傾けた。

## 3. 教室の発展

教室は発展し、研究成果も生まれ、教室員の業績も飛躍的に向上していった(図8)。そうしているうちにスタッフである清水忠道先生(富山大学)、西村栄美先生[金沢大学(現在は東京医科歯科大学)]、澤村大輔先生(弘前大学)(図9)、秋山真志先生(名古屋大学)、阿部理一郎先生(新潟大学)らが次々に他大学の教授と



図9 澤村大輔先生(右)の弘前大学教授就任祝い

して赴任していった。赴任に伴い、教室の戦力は一時的にかなり縮小したが、その彼らが教え育ててくれた後継者が仕事を継いで、先輩たちに引けを取らない新しい戦力となってくれた。教室員が北大医学部のベストティーチャーズ賞に毎年選ばれ、北大皮膚科の教育も軌道に乗った。研究面でいえば、従来の表皮水疱症の研究、水疱性類天疱瘡の研究に加えて外科班のメラノーマ・乳房外Paget病の研究、角化症グループの研究等が台頭してきた。研究の幅も大きくなり、教育の幅も広がった。

#### 4. 教室年報の充実・英語化、教室ホームページの拡充

毎年の教室年報『Annual Report』(別名:甲子会だより)は、内容を充実させ、基本的に英語化した。出版により、世界に北大皮膚科からの情報を発信し、教室員に自信と自覚をもたせることができた。さらに教室ホームページを拡張・充実させ、新入局員を全国レベルで勧誘することを可能にした。

#### 5. 北海道大学皮膚科への思い、今後の展望

日本で行われた当該年度のもっとも優れた研究論文に贈られる日本皮膚科学会最高峰の「日本皮膚科学会賞・皆見賞受賞論文」の北大からの受賞は5回を数え、もっとも優れた研究者に贈られる「日本研究皮膚科学会賞」は3人の准教授が獲得して他大学の教授として羽ばたいていった。いまの教室スタッフはすべて一流の英文誌により学位を取得し、留学も経験した視野が広い人間ばかりである。他大学が羨むほどの優秀な人材を擁する皮膚科学教室であり続けている。

この21年間を振り返ってみると、前半はひたすら自分が先頭に立ち、教室員を率いて人を育てることに没頭した。しかし、後半に至っては人を育てることにより、自分が育てられていると痛感している。自分が教授として満足した成果をあげることができたのは、自分が教室員に支えられているからこそだと悟った。人を育てるということは自分が育つということであり、21年間も大過なく教授を務めさせていただいたことは、ひたすら皆に感謝すべきと思っている。一皮膚科医として、北大皮膚科教授として、自分は精一杯頑張ってきたので、思い残すことは何もない。ただ、世界一になることは簡単ではないし、世界一流の皮膚科学教室であり続けることは、より多くの努力が求められる。常に教室員が自分の実力の1.2倍の努力を目指して欲しいとの思いがある。

私が退官した後、新しい皮膚科教授が北大スタッフとともに北大皮膚科をさらに大きく率いてくれることであろう。今後さらに北大皮膚科が発展し、世界のサイエンスと、医療の向上に大きく貢献してくれることを祈念している。そして私は、新しい北大の活躍を頼もしくみつめながら、退官後はじっくり時間を使って、単著で書き上げた『あたらしい皮膚科学』と『Shimizu's Dermatology』の改訂作業をこつこつと5年計画で実行し、日本だけでなく世界の皮膚科学の教育と臨床に少しでも貢献したいと考えている。

皆様、これまで支えていただき、誠にありがとうございました。